

17回目のサンケイホールブリーゼ独演会！

桂吉弥、受け継ぐ伝統と切り開く新境地

桂米朝、そして師匠・桂吉朝の芸を礎に、上方落語の本流をまっすぐに受け継いできた桂吉弥。確かな語り口と端正な高座で早くから頭角を現し、いまや米朝一門を担う存在の一人として厚い信頼を集めている。入門から30年以上過ぎててもなお、米朝や吉朝がやっていたとおりの落語がしたいと語るその姿勢は一貫してぶれず、一方では新作落語にも積極的に取り組み、芸の幅を広げてきた。今年で17回目を迎えるサンケイホールブリーゼでの独演会でも、「まだやっていないネタをしたい」と意欲を見せる。

米朝譲りの 古典と演芸作家の新作

5月30日(土)は「帯久」、「AIシテル」を、31日(日)は「しじみ売り」、「阿武松(おおうのまつ)」、そして各日、他一席を披露する。「帯久」は、帯屋久七に百両をだまし取られた和泉屋が、困窮の末に放火未遂を起こし、大岡越前に訴え出るという古典落語で、裁きの行方と人の情が見どころの一席。



「帯久」は米朝師匠がすごく大事にやってはったネタなので、去年の博多・天神落語まつりで立川志の輔さんが「今まで博多・天神まつりで1度も上がっていないネタをやりたいと思います」と言って「帯久」をされたんです。その時、米朝師匠が僕らのために大阪弁で残してくれたこのネタを俺がやらなと思ったんです。

改めて米朝の高座を聞き直し、いくつもの気づきがあった。「とにかくスピードが速いです。囃の中に師匠が思っていること、言いたいことをいっぱい詰め込んでいるので情報量も多い。でも、お客さんを囃の世界にちゃんと引きずり込んで、エンタメになっている。僕もテンポよく、わくわくと軽くしゃべりながらも、江戸時代の大坂の町や当時の人物がお客さんの目の前に立ち上がるような高座ができれば」。

「AIシテル」は、AIに恋をした男の物語で、演芸作家・石山悦子による第3回上方落語台本大賞の大賞作だ。石山からのリクエストを受け、今年2月に天満天神繁昌亭で初披露した。「去年までサンケイホールブリーゼの独演会では干支にちなんだ自分の新作を口演していました。それも一回りしたので、

作家さんの囃をやらせてもらってもいいかなと思っていたところに石山さんからお話があり、今年の演目に入れました。石山さんの囃は言葉も粒立っていますし、映像が浮かびやすい。古典落語に近い構成でもあるので、ちゃんと空間や状況を描いたら、お客様に楽しんでもらえるのではないかと思います」。

趣の異なる人情囃の二本立て

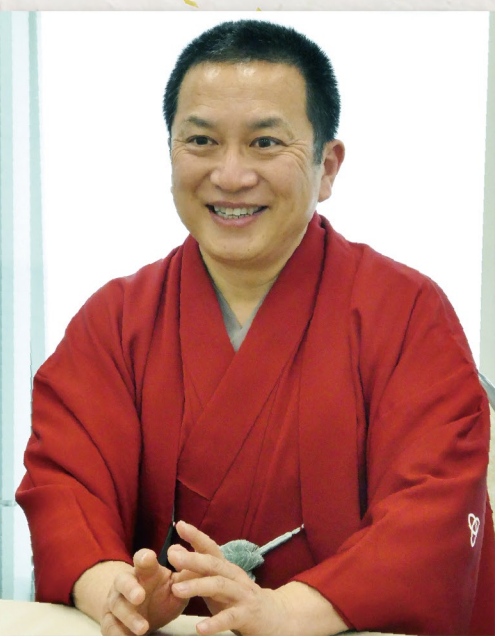
31日(日)は、十日戎の日にしじみを売り歩く少年と商家の親方とのやり取りを描いた人情囃の「しじみ売り」を口演。

「桂福團治師匠に稽古をつけてもらいましたが、ここ数年、一緒に出させてもらうことが多くて。これは「一つぐらい福團治師匠に稽古してもらえよ」という落語の神様からのメッセージやないかなと思いついて、お稽古をお願いしました。師匠の描く冬の感じとか、登場人物がとっても好きですね」。

もう一席の「阿武松」は石川・能登出身の第6代横綱の成功譚。昨年夏、ボラ

ンティアで能登のあばれ祭に参加した際、巡り合い、東京の柳亭市馬に稽古をつけてもらった。

「阿武松は、タダ飯が食べられるという理由から相撲取りになったのですが、横綱までのし上がった。人生、何があるかわかりません。僕も大学に入るまで落語を聞いたこともなかったですし、落語家になるなんて思っていませんでした。ちょっとした人の縁や運で自分の仕事になるのは面白いなと思って、自分と重ね合わせながら稽古しています」



「吉弥の落語を聞いてスカッとした、面白かった、楽しかったという人を一人でも多く増やしたいですし、面白い落語家になりたい。この独演会のポスターは険しい顔をしています(笑)、にこにこ楽しそうな顔で落語をしたいです」。

桂吉弥独演会

2026年5月30日(土)・31日(日) 両日とも 14:00開演(13:15開場)

「帯久」「AIシテル(石山悦子作)」「しじみ売り」「阿武松」
ほか一席 ほか一席

全席指定 4,500円(税込) サンケイホールブリーゼ **好評発売中!**

PROFILE

桂吉弥 (かつらぎちや)

1971年2月25日生まれ、大阪府茨木市出身。落語会を見に行くうちに桂吉朝の落語に出会い、弟子入りを決意。大師匠桂米朝宅で3年間の内弟子修業ののちに一人立ち、大阪を中心に関西地方で数多くの落語会を主催している。勢いよく伸びのある語り口が魅力の、若さいっぱい元気な明るい囃家。古典落語の魅力を多くの人に伝えようという意気込みを持ち、今日も落語に芝居に頑張っている。



どこか運命めいた囃だったのかもしれない。

「不勉強だったので、その時までこの囃も力士の存在も知りませんでした。阿武松という名前は今でも残っているんですよ。よう考えたら、僕、高校生の時に第12代阿武松親方である益荒男さんに整骨院でお会いしたことがあったんです。さこば師匠も親方と仲良かったりして、そういうご縁もありました」。

落語家として、これから

当日のお楽しみである他一席も「自分の可能性を今からもっと広げたいと思って選ぶつもり」と吉弥。今後の抱負を尋ねると、笑顔でこう話した。

「吉弥の落語を聞いてスカッとした、面白かった、楽しかったという人を一人でも多く増やしたいですし、面白い落語家になりたい。この独演会のポスターは険しい顔をしています(笑)、にこにこ楽しそうな顔で落語をしたいです」。